Text/Atsushi TAMADA

デイトナが提案する
新しい建築のカタチ

DH×L
DAYTONA HOUSE×LDK

デイトナハウスと〝デザイン〟。

デイトナハウスにとっての〝デザイン〟について、改めてじっくり考えてみました。単なる表層のラッピングとしてのデザインではなく、力を支える〝構造体〟が建物のカタチの印象を形成する、〝構造デザイン〟の世界。坂口安吾が示す〝必要〟の概念が大切な示唆を与えてくれるのです。

〝デザイン〟という言葉を再考する

〝デザイン〟というワードは、誰にとっても良い印象で受け入れられている言葉だと思います。生きていくための最低条件、日々の食事やねぐらの確保、家族を養う責任などにあくせくする現実的な〝生活〟。〝デザイン〟という言葉には、そう言った現実的な世界とは異なる境地のイメージがあります。

特に戦後、一旦焼け野原になって、その日の食事もままならない状況に陥った我が国にとっては、この美意識至上主義的な言葉は、「上の、そのまた上的」な甘美な憧れを伴った言葉であった時代も想像されるのです。その後、朝鮮特需、高度経済成長、バブル経済と時代が変遷し、衣食足りる時代になる中で、日本人はデザインを再び意識する余裕を得ます。その時、日本人にとっての〝デザイン〟には、アメリカ的なものあるいは西洋的なものというイメージが付着しました。何でもかんでも横文字で表現したり、オランダ村、ドイツ村など西洋の国名と〝村〟を合体させたネーミングを持つテーマパークなど、今から見れば陳腐ですが、〝借り物〟のイメージを付加することが〝デザイン〟と認識される時代があったことも確かなのです。

そして、バブルの崩壊後「失われた30年」と呼ばれるゼロ成長時代に突入した私たち日本人ですが、この山道を上り詰めて高原に至ったような成長なき時代〝高原化社会〟と呼ばれる現在は、考え方次第では、案外落ち着いて自分たちの「来し方と行く末」を見つめなおす絶好の機会なのかもしれません。そんな心境の中で、そもそもデザインとは何か？また、デイトナハウスにとってのデザインとはいかなる指向性なのか？を考えてみたいと思います。

平面デザインと量塊のデザイン

真っ白な紙に一本線を引くだけでも書く人によって様々な個性が現れます。白い紙のどの場所にどんな強さで線を引くか？　それによって印象が違って見えます。そもそもそこからデザインと言うものは始まっているのかもしれません。二次元の世界のデザインは、日常生活にとても距離の近い世界です。それと意識していなくても、人は知らず知らずのうちにデザイン的な思考を行っているともいえます。その発展形がグラフィックデザインやタイポグラフィの世界。つまり平面的なデザインの世界です。それは絵画に近く、しかしそれであるがゆえに、あえて絵画とは別の概念として認識されました。

しかしその一方で、物体の塊そのものをデザインするという世界が確実に存在します。芸術作品としての物体は別として、一般には我々が普段使うモノ＝プロダクトのデザインです。その場合、モノのカタチそのものが美観と機能を両立させていることが理想なのです。しかし、それはなかなか困難で高度な世界でもあります。そこで世間に流通するモノを、その観点でつぶさに観察すると、モノのデザインに関する評論の座標軸が浮かび上がってくるのです。

その座標軸に照らし合わせて観ると、普段慣れ親しんだモノや商品が別のイメージで見えてきます。案外多いのは、無愛想で殺風景ながらある機能を満たしているモノに、体裁よく〝デザイン〟された表層を合体したタイプ。例えば自動車が典型的でわかりやすいかもしれません。自動車の主要な機能を満たす骨組みとエンジンとタイヤ。それだけでは無骨なる機能そのものです。そこに空力等が考慮された様々なフォルムや色にデザインされたボディをかぶせる。ほとんどの人は、そのカウルのデザインの良し悪しを購買欲の基準にするのです。

力の伝達を受け持つ構造体が同時に美しい印象を形成する構造デザインの代表的な建築、丹下健三の『国立代々木競技場体育館』。アーチ橋のような“柱のない空間”としての本質がデザインとして東京オリンピックの象徴になった傑作建築です。

What's DAYTONA HOUSE×LDK？

デイトナハウス×LDKの建築システムを構成するのが軽量鉄骨のLGSパネル。厚さ3㎜～4㎜、幅12.5㎝、厚み5㎝の『Cチャンネル』と呼ばれる部材を、横幅182㎝、縦270㎝の長方形に溶接して製作。デイトナハウスは、この基本の形を連結することで、住宅やガレージのみならず、別荘、店舗、賃貸住宅などの様々な建築を作っていく、全く新しい建築のカタチとなっています。パウダーコーティングが施されたその鉄の素材感と、力の伝達を受け持つ『ブレース』が織りなす、インダストリアルで飽きの来ない空間のテイストも持ち味となっています。

LDK inc. 代表　玉田敦士
デイトナをはじめ、カーマガジンでの長期連載、ムック本であるCAR&HOMEにて、常にクルマと住宅の関係について提案し続けてきた建築プロデュース会社LDK inc.。建築設計はもちろんのこと、建築システムの開発や商品開発も行う。
www.daytona-house.com

デイトナハウスのLGSパネルと、それを連結して構成した構造骨格。無駄のない鉄骨構造体がそのまま内部の意匠として印象を残してくれます。大地に突き刺さる先端羽根付き鋼管杭もありのまま見せる事で、デザインとして昇華しています。

あるいは焼き物の世界の陶器と磁器。量塊感そのものを味わう備前焼と表面の絵付けを味わう有田焼の違いが、物体＝モノのデザインの評価基準の一つになると思います。しかし、少なくともモノの良し悪しを論ずるに際して、表層のみに関心を奪われてしまっては、モノの本質が見えていないということになります。〝表層と本質〟という観点がここで浮かび上がってくるのです。

建築におけるデザインの座標軸

建築という〝物体〟のデザインについて、先述した〝表層と本質〟という座標軸に沿って改めて少し考えてみたいと思います。現代のモダニズム建築は16～19世紀に至る様々な「様式建築」。例えばロマネスク、ゴシック、バロック、ルネッサンス、ロココ、新古典主義などによる宗教思想的な制約を離れ、思い思いのカタチと意匠を凝らす〝自由〟を獲得しました。それは西洋社会が「神は死んだ」（ニーチェ）と表現される、ある意味では「何でもあり」の世界に突入したということでもあります。

一方、明治以降の日本の建築、特に官庁建築は建築家の好みによって上記の西洋の宗教に裏打ちされた「様式」を、時代に関係なく採用する、一種の「博覧会的状態」でした。その場合、建築家はある意味で西洋建築様式の輸入業者的だったともいえます。どの様式を採用するか？　それがデザインと後世では解釈される日本特有の状態が存在しました。一方でバナキュラー（そもそも日本に根付いた）な在来木造建築の世界も同時並存していました。そのように、我が国における建築は、短期間に西洋建築の「様々な意匠」をブレンドして採用し、その挙句に空襲で焼け野原となった極めて特異な歴史の上に成り立っています。戦後の焼け跡に、丹下健三をはじめとする若手建築家の建造物が、独特の迫力を伴って、コンクリートの量塊感そのものを印象付けるのは、上記のような〝本質と表層〟についての問題意識が多分に反映されていると私は思っています。

例えばその傾向は丹下健三の『広島平和記念資料館』や『国立代々木競技場』などに典型的に見て取れます。〝構造体〟がそのまま〝デザイン〟となっているような建築です。その一方で一般的な建築の世界では、〝表層〟と〝本質〟の分離には拍車がかかりました。在来木造建築は、竪穴式住居や高床式倉庫のように、本来は構造体をそのままむき出しにしたものでしたが、戦後その構造体は内部においてはプラスターボードとビニールクロス、外部は防火サイディングという素材で覆われていきます。あたかもそれは「自分ではない何者か」に見せようとするかのようです。いわば本質は限りなく矮小化され、表層だけが主張する状態です。そのような環境でデザインが語られることが一般化しました。後述しますが、デイトナハウスの建築（軽量鉄骨パネル工法）は、再び〝表層と本質〟の一体感を回復して、しかもそれをレゴ建築として一般的に普及させたいという方向性を持っているのです。

坂口安吾の〝必要〟を基準にした建築論の新鮮な印象

戦後の焼け跡の日本人に、もっと本音で生きろ（生きよ堕ちよ！）と喝破した『堕落論』の作家、坂口安吾は「日本文化私観」という文章の中で、表層と本質やデザインという観点にとって示唆に富んだ指摘をしています。ナチスに追われて日本に亡命中だったドイツの建築家『ブルーノ・タウト』が桂離宮を激賞したことは有名な話ですが、安吾はそのことに触れて「京都の寺や奈良の仏像が全滅しても困らないが、電車が動かなくては困るのだ。我々に大切なのは「生活の必要」だけで、古代文化が全滅しても、生活は亡びず、生活自体が亡びない限り、我々の独自性は健康なのである。なぜなら、我々自体の必要と、必要に応じた欲求を失わないからである」と表現しています。外国人に見える古刹、伝統建築物はむしろ〝表層のこと〟であり、日本人の生活実感そのものが〝本質〟であると言っているかのようです。それにしても驚かされるのは、まるでこの後、日本中が空襲で焼け野原になるのを薄々予感しているかのような文面です。この文章が書かれたのは太平洋戦争真っただ中の昭和17年（1942年）2月ですから、まだ空襲や敗戦の気配はなく、むしろ日本は連戦連勝気分の頃でした。

安吾はこのあと自分が心惹かれる建築物を3つ列挙しています。それは、『小菅刑務所』と『ドライアイス工場』と『駆逐艦』だというのです。どれも機能が表面に露出したような建造物です。

「この三つのものが、なぜ、かくも美しいか。ここには、美しくするために加工した美しさが、一切ない。美というものの立場から附加えた一本の柱も鋼鉄もなく、美しくないという理由によって取去った一本の柱も鋼鉄もない。ただ必要なもののみが、必要な場所に置かれた。そうして、不要なる物はすべて除かれ、必要のみが要求する独自の形が出来上っているのである」

美的配慮ではなく、必要によって必要な箇所に配置された諸機能の美しさ。これはまさに別の意味合いでの表層と機能の一体化ではないでしょうか？　ちなみにこの文章は今でいう〝工場萌え〟の走りの文章として、一部のファンには有名な文章になっているのです。ここで表現されている〝必要〟という概念も、デイトナハウスの建築における重要な要素だと考えています。

戦後、無頼派と呼ばれた『堕落論』の作家、坂口安吾が『日本文化私観』の中でその美しさを褒めた『旧小菅刑務所庁舎』。収監者の管理の合理性からくる必然的なカタチが、そのまま白鳥が大きな翼を広げたような印象を形成しています。必要が結果的にデザインとして機能しているのです。

“合掌”という構造的に安定したカタチが、そのまま吹き抜けの空間性という機能と、鮮烈な外観の印象を同時に成立させている新しいタイプのデイトナハウス建築。登り梁も鉄骨パネルで形成しているところが斬新なのです。

© 設計・建築
デイトナハウス×LDK浜松（バランスデザイン）

ユーザーにとって“必要”な愛着のギア類をディスプレイ的に格納することが、そのまま空間の“デザイン”となるセルフデザイン。これもデイトナハウスのデザイン論です。

ラッピング主義ではない〝本質〟を引き出すデイトナハウスにとっての〝デザイン〟

無骨なる〝本質〟と〝機能〟を、デザインされた表層で覆い隠す手法を〝ラッピング主義〟と呼ぶとすれば、デイトナハウスは構造体として必要な骨組みを別の表層でラッピングすることを拒否した建築ということができます。クルマに例えればフォーミュラーカーのような、無駄な意匠を必要としない建築ということもできます。力を受け持ち必要な骨格＝鉄骨構造体が、独特のオーラを発する空間。それ自体を美しいものと考えています。それがデイトナハウスが目指す、〝構造デザイン〟の世界です。表層と本質を分離して体裁を作るのではなく本質そのものが醸し出すオーラを引き出したいのです。しかし、本来それは日本人にとっては馴染みのある世界のはずです。例えば古い神社仏閣や古民家も同じく、構造体露出の建築だからです。そしてその構造デザイン的スタンスは、もっとさかのぼれば、縄文人が暮らした竪穴式住居にまで通底するものなのです。あえてデイトナハウスにとっての〝デザイン〟の位置づけを問うならば、このような考え方そのものを〝デザイン〟と呼びたい。と考えているのです。

デイトナハウスの「セルフデザイン主義」デザインを楽しむのはユーザーの領域に

布に見せたビニールであるビニールクロスや、木材に似せたプラスチックなどのフェイクな素材で表面をラッピングする、そのような一般の建築手法とは明確に一線を引いているデイトナハウスですが、〝表層〟のデザインを全否定しているわけではありません。露出させた骨格に、空間を使う人が自分なりにディスプレイを楽しみ、自分だけの愛着の世界をそこに現出させることその営為をデイトナハウスは〝セルフデザイン〟と呼んでいます。その楽しさはむしろ使う人の領域だと考えているのです。ディスプレイ＝セルフデザインは、空間への愛着を自足させるための非常に大切な要素だと考えているのです。骨格を作るデイトナハウスとその骨格を使ってディスプレイによって自分のライフスタイルをユーザーが表現する。いわばその共同作業によって空間が本来の意味で〝出来上がる〟のです。

デイトナハウスの住宅商品の規格『TYPE-B』と店舗建築の規格『TYPE-S』の双方の性格＆機能を併せ持ったデイトナハウス×LDK北本のショールーム『BIG DOCK』。

© 設計・建築　デイトナハウス×LDK北本（ハーツ建築工房）

通常タイプのGLBよりも奥行きを1スパン伸長させた内部空間。ガレージ奥のホビールームは、オリジナルの螺旋階段『ダイナソーボーン』の無骨な存在感も相まって、ユーザーのセンスを表現するディスプレイ空間となっています。愛車や愛機を眺めながら、活力を充電し、インスピレーションが湧きまくるのです。2Fの吹き抜け付き大空間も1スパン伸長のゆったりタイプです。まさに“BASE＝出撃基地”の名に相応しいプライベート空間。ここはモーターフリークの元気増幅装置なのです。

オリジナルのスチールサッシのシャープなラインが独特のアーリーモダンな印象を醸し出すGLBの完成イメージパース。工業化初期の製作物の人肌の表情に敬意を表し、無思想の大量生産品であるアルミサッシではない顔を作ること。ユーザーの愛着の持続に寄与するデイトナハウスの矜持なのです。

京成＋デイトナハウスのコラボレーション企画

市川市に登場する全12戸のモーターコミュニティ

時代の変化がカタチになって表れたような、鉄道会社とデイトナハウスのコラボ型GLB 2棟が、千葉県市川市に建築中です。使い方もユーザー次第で様々なケースが想定可能。従来のGLBをさらに充実させた仕様となっています。時代の変化を先取りした、あなた独自の元気なライフスタイルを想像してみてください。

「21世紀の変化の実像が目視で確認できるようになってきた」。そのようにしみじみ感じておられる方も多いと思います。今回ご紹介するモーターコミュニティ型賃貸住宅『LAND BASE ICHIKAWA』も、まさに時代の変化を実感させる〝静かな事件〟と言えるかもしれません。

〝事件〟とは何か？　それは何の脈絡もなく突然に表出するのではなく、多くの人々が共同に感じている潜在的なイメージが、具体的なカタチを伴って目の前に現出する事だと再定義できると思います。デイトナハウスはすでに関西圏において鉄道高架下の賃貸ガレージハウスを展開しています。しかし今回は、高架下の余剰敷地の有効利用ではなく、鉄道会社が持つ遊休地に新たに計画した賃貸型モーターコミュニティなのです。

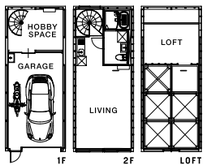
鉄道とモーターライフ。言わばライバルとも言える移送手段の二様態を鉄道会社が矛盾なく開発し始めることに、21世紀型の〝静かな事件性〟を感じないわけにいきません。京成グループが、20世紀型の安定的な開発を超越した〝新しい沿線ライフスタイルの模索＆提案〟を始めたという気迫さえ感じるのです。

『LAND BASE ICHIKAWA』は、デイトナハウスの賃貸ガレージハウス『GLB』の特長である鉄骨露出のインダストリアル建築を完全に踏襲しています。しかしそのプランは2×5スパンという拡大変形バージョンで、ユーザーのモータライフの充実を企図したものになっています。ガレージ奥にはホビールームを完備。ここで仕事をしたり、〝クルマやバイクと寝る〟というシーンさえも想定できる新趣向なのです。

同物件は、東京外環自動車道『市川中央IC』まで約2分というクルマ＆バイク好きには堪らない好立地。高速ICから近いので各種レジャーの基地的利用をはじめ、セカンドハウスユースとしても相性抜群です。最寄り駅である京成本線『菅野駅』まで約16分で、JR『本八幡駅』まで約19分。完成は2025年の春頃となっています。

LAND BASE ICHIKAWA

Floor Plan & Data



FOR RENT

賃料	19万1000円（管理費込み）
敷金礼金	各1ヶ月
入居開始	2025年春頃予定
所在地	千葉県市川市平田4丁目（以下未定）
総戸数	A棟 6戸／B棟 6戸
住戸面積	70.2㎡（＋ロフト）～70.9㎡（＋ロフト）
交通	京成本線『菅野駅』まで約16分、JR『本八幡駅』まで約19分
設備	バストイレ別／エアコン（ガレージ＆LDK）／ガレージ電動シャッター／ホームセキュリティ完備／インターネット利用料無料（1Gbps）／敷地内ゴミ置き場
その他	ペット不可／石油ストーブ不可／シェア賃貸可（契約は代表者1名）／1Fガレージでの空ぶかしや、大きな騒音の出る工具や機械の使用、火器、および周辺住人に迷惑がかかる行為の禁止／退去時ハウスクリーニング費用借主負担／その他契約に定める条項による

物件詳細はこちらから

※CGはイメージです、内外装等は実際の仕様とは異なる場合は現況優先となります。